

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2016/08/01

夏季休暇シーズンで材料待ちか

| 通貨ペア | 基調 | | ページ数 |
|------------------------|----|---|-------|
| ユーロ/円 | ↘ | 月・週・日で三役逆転が点灯 予想レンジ： 109.200～117.300円 | 2 - 3 |
| ユーロ/ドル | → | ECB理事会に注目 予想レンジ： 1.08500～1.12500ドル | 4 - 5 |
| ポンド/円 | → | スーパーサズデーが当面のカギ 予想レンジ： 127.000～143.500円 | 6 - 7 |
| ポンド/ドル | ↘ | ドル主導の動きにも注意 予想レンジ： 1.27000～1.36000ドル | 8 - 9 |

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



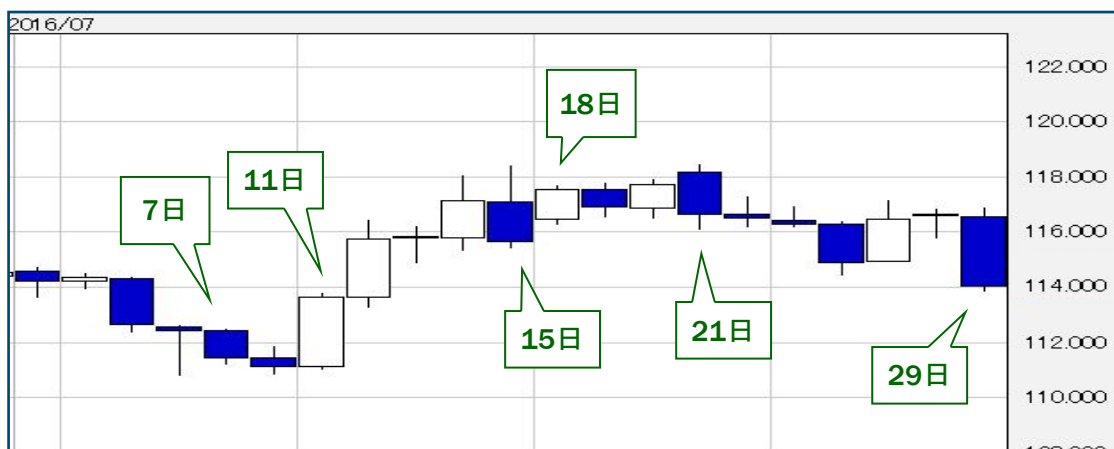
本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2016 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 7月の推移

7月のユーロ/円相場は110.824～118.463円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.4%の小幅安(ユーロ安・円高)となった。

月初は英国の欧州連合(EU)離脱決定が欧州経済に及ぼす影響が懸念され、リスク回避ムードとなる中、ユーロ/円は6日に110.824円まで下落。その後はNYダウ平均が連日史上最高値を更新するなど、リスク回避の動きが後退した事や、本邦参議院選挙に政府の景気刺激期待が徐々に高まると共に円安が進んだ事から、118円台を回復したが上値は重かった。さらに、29日には日銀が発表した金融緩和策を受けて失望の円買いが強まると、一時113円台に下落した。月を通して見ると、英EU離脱決定の影響が一巡した後は本邦政局に左右される展開が目立った。



| 四 本 値 | |
|-------|---------|
| OPEN | 114.587 |
| HIGH | 118.463 |
| LOW | 110.824 |
| CLOSE | 114.083 |

| | |
|-----|--|
| 7日 | 6月2日に行われた欧州中銀(ECB)理事会の議事録が公表され、「英国がEU離脱を決めれば、貿易や金融市場など多岐にわたる経路を通じて、ユーロ圏にかなりの悪影響が及ぶ恐れがある」「新興国などユーロ圏域外の弱含みや域内企業の継続的な負債圧縮が成長を阻害しており、リスクは依然下向き」などが明らかとなった。 |
| 11日 | 本邦参議院選挙で大勝した安倍自民党総裁が「しっかり内需を下支えする総合的かつ大胆な経済対策を実施したい」などと発言すると、景気刺激期待が高まり日経平均が一時700円超上昇。前連邦準備制度理事会(FRB)議長のバーナンキ氏が日銀を訪問したとの報道も、デフレ脱却期待を高めて株高・円安を後押しした。更にNYダウ平均の堅調推移も追い風となり、ユーロ/円は113.70円台まで上昇した。 |
| 15日 | 引け間際に「トルコで軍の一部によるクーデターが発生」と報じられると、地政学的リスクが意識されてユーロ売りが強まった。これを受け、ユーロ/円は115.449円まで下落した。 |
| 18日 | 15日のNY市場終盤に発生したトルコのクーデターが未遂に終わった事を受け、リスク回避の円買いが進んだ反動が出ると、ユーロ/円は買い優勢でスタートした。 |
| 21日 | 黒田日銀総裁が「ヘリコプターマネーについて、必要も可能性もない」と発言した事などから、円買いが活発化すると、ユーロ/円が一時116.148円まで急落した。ドラギECB総裁が政策金利据え置きを決めた理事会後の会見で「英EU離脱決定による影響を見極めるのは時期尚早」「必要なインフレと成長押し上げに向け、一段の行動を取る用意がある」「買入れ規定の変更に関しては協議しなかった」などと発言。早期の追加緩和を示唆しなかったため、ユーロ/円は上昇。ただ、米10年債利回りが一時1.62%台まで上昇した事を受けてドル買いが優勢となると、ユーロ/ドルの下げに連れて反落した。 |
| 29日 | 市場で緩和期待が高まる中、日銀がETFの買入れ増額(3.3兆円→6兆円)を発表すると、円売りが優勢となりユーロ/円は116.892円まで値を上げた。しかし、長期国債やREITの増額、政策金利の引き下げは見送られたため、失望の円買いが強まると113.80円台まで反落した。なお、ユーロ圏7月消費者物価指数は前年比+0.2%と、4-6月期国内総生産(GDP)は同+1.6%と、それぞれ予想(+0.1%、+1.5%)を上回ったが、反応は限定的であった。ちなみに、欧州銀行監督機構(EB A)が実施した銀行ストレステストでは、モンテ・パスキが最下位となり資本不足の恐れを指摘されるも、ほとんどの銀行は欧州連合(EU)の求める最低限の自己資本比率(コアtier1比率4.5%)を維持している事が明らかとなった。 |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/JPY

日経平均

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 15698.02 |
| HIGH | 16938.96 |
| LOW | 15106.52 |
| CLOSE | 16569.27 |

独 D A X

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 9742.84 |
| HIGH | 10381.90 |
| LOW | 9304.01 |
| CLOSE | 10337.50 |

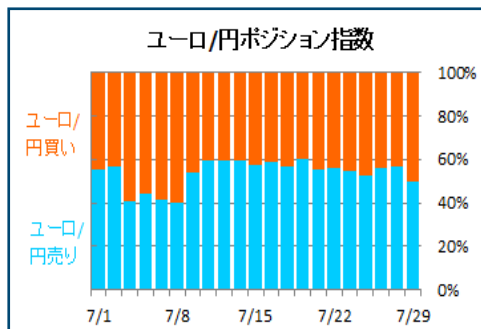
独2年債利回

| | |
|-------|---------|
| OPEN | -0.652% |
| HIGH | -0.599% |
| LOW | -0.708% |
| CLOSE | -0.625% |

独10年債利回

| | |
|-------|---------|
| OPEN | -0.134% |
| HIGH | 0.029% |
| LOW | -0.205% |
| CLOSE | -0.119% |

7月のポジション動向



8月のユーロ圏の注目イベント

- ・6月ユーロ圏小売売上高(3日)
- ・6月独鉱工業生産(8日)
- ・4-6月期ユーロ圏GDP・速報値(12日)
- ・8月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(16日)
- ・ECB理事会議事録(18日)
- ・8月独/ユーロ圏PMI製造業・速報(24日)
- ・8月独Ifo景況感指数(25日)
- ・8月独消費者物価指数・速報値(30日)
- ・8月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(31日)

8月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

7月のユーロ/円は、値を上げるも13週移動平均線を前に失速。週足では13・26・52週線の傾きがいずれも下向きとなっている上、ローソク足は一番下にある13週線よりも下に位置している。また、一目均衡表を見ると、前月に続き週足と月足で三役逆転が点灯しているなど、下向きの流れを変えるには至らなかった。テクニカル面では、今月も引き続き下値が意識されやすいと見る。6月24日安値(109.197円)～7月21日高値(118.463円)の61.8%押し(112.737円)を割り込むようだと、7月6日安値(110.824円)や6月24日安値を順に試す事も考えられる。

もっとも8月は、ユーロ圏や本邦で金融政策など目玉となりそうな経済イベントが予定されておらず、全般的に手掛かり材料に乏しい。加えて、世界的な夏季休暇のシーズンでもある事から、為替のみならず株式や商品市場でも様子見ムードが広がるようならば、ユーロ/円はこう着した展開となる事もあるだろう。(川畑)

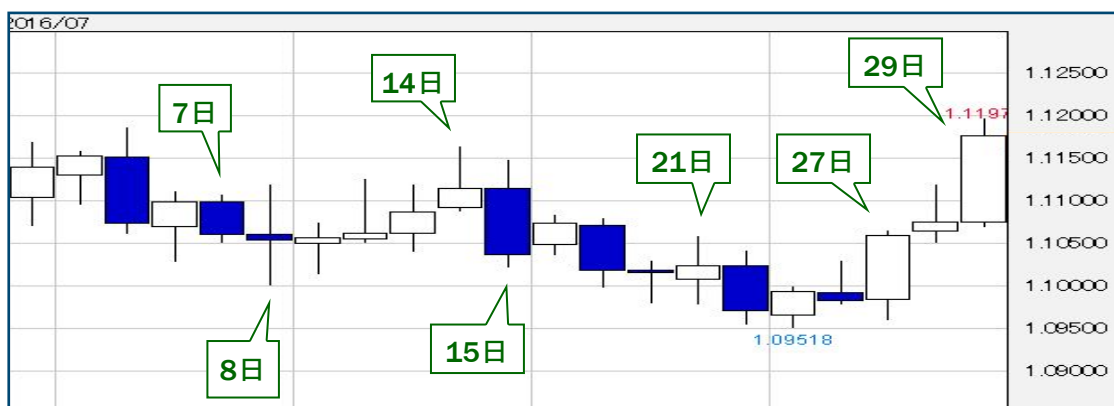
(予想レンジ: 109.200～117.300円)

EUR/USD

ユーロ/ドル 7月の推移

7月のユーロ/ドル相場は1.09518～1.11972ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.7%の小幅上昇(ユーロ高・ドル安)となった。

米連邦公開市場委員会(FOMC)や欧州中銀(ECB)理事会では、いずれも金融政策が現状維持となった上、今後の金融政策についての手掛かりに乏しかったため、ユーロ/ドル相場に与えた影響は限定的であった。手掛かり材料を欠く中、7月のユーロ/ドルの値幅は245.4ポイントと今年最小であった4月(246.8ポイント)よりもさらに小動きとなった。



| 四本値 | |
|-------|---------|
| OPEN | 1.11052 |
| HIGH | 1.11972 |
| LOW | 1.09518 |
| CLOSE | 1.11773 |

| | |
|-----|--|
| 7日 | 6月2日に行われたECB理事会の議事録が公表され、「英国がEU離脱を決めれば、貿易や金融市場など多岐にわたる経路を通じて、ユーロ圏にかなりの悪影響が及ぶ恐れがある」「新興国などユーロ圏域外の弱含みや域内企業の継続的な負債圧縮が成長を阻害しており、リスクは依然下向き」などが明らかとなった。 |
| 8日 | 米6月雇用統計は非農業部門雇用者数が予想を大きく上回る伸びとなるも、平均時給の伸びが予想を下回るなど、強弱入り混じる結果となった。これを眺め、ユーロ/ドルは1.10021ドルまで急落後に1.11101ドルまで切り返すなど、神経質な値動きとなった。 |
| 14日 | 英中銀(BOE)が予想に反して政策金利を据え置いた事から、ポンド/ドル相場でポンド買い・ドル売りが強まると、これに連れてユーロ/ドルは一時1.11646ドルまで上昇。しかし、米新規失業保険申請件数や米6月生産者物価指数がいずれも予想より強い結果となり、ドル買いが強まると、反落した。 |
| 15日 | 米7月小売売上高や米7月消費者物価指数が予想より上回る結果となった事でドル買いが優勢となった上、NY市場終盤に「トルコで軍の一部によるクーデターが発生」と報じられると地政学的リスクが意識され、ユーロ/ドルは1.10228ドルまで下落した。 |
| 21日 | ドラギECB総裁が政策金利据え置きを決めた理事会後の会見で「英EU離脱決定による影響を見極めるのは時期尚早」「必要ならインフレと成長押し上げに向け、一段の行動を取る用意がある」「買い入れ規定の変更に関しては協議しなかった」などと発言。早期の追加緩和を示唆しなかったため、市場はユーロ買いで反応。ただ、その後は米10年債利回りが一時1.62%台まで上昇した事を受けてドル買いが優勢となると、反落した。 |
| 27日 | 米FOMCの声明で「雇用データはここ数カ月で労働力活用の一定の増加を示している」「景気見通しの短期的なリスクは後退」などの見方が示されるとドル買いが強まり、ユーロ/ドルは一時1.09608ドルまで下落。しかし、「FF金利の道筋は今後出てくる経済見通し次第」など、9月利上げを示唆する手掛かりが見当たらなかった事から米長期金利が低下すると、1.10647ドルまで切り返した。 |
| 29日 | ユーロ圏7月消費者物価指数は前年比+0.2%、4-6月期国内総生産(GDP)は同+1.6%と、それぞれ予想(+0.1%、+1.5%)を上回ったが、反応は限定的。その後、米4-6月期GDPが予想を大きく下回った事を受けてドル売りが強まると、ユーロ/ドルは1.11972ドルまで上昇した。なお、欧州銀行監督機構(EBA)が実施した銀行ストレステストでは、モンテ・パスキが最下位となり資本不足の恐れを指摘されるも、ほとんどの銀行は欧州連合(EU)の求める最低限の自己資本比率(コアtier1比率4.5%)を維持している事が明らかとなった。 |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/USD

NYダウ平均

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 17924.24 |
| HIGH | 18622.01 |
| LOW | 17713.45 |
| CLOSE | 18432.24 |

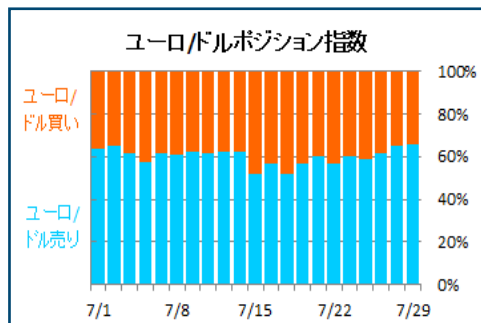
独10年債利回

| | |
|-------|---------|
| OPEN | -0.134% |
| HIGH | 0.029% |
| LOW | -0.205% |
| CLOSE | -0.119% |

米10年債利回

| | |
|-------|---------|
| OPEN | 1.4680% |
| HIGH | 1.6266% |
| LOW | 1.3180% |
| CLOSE | 1.4531% |

7月のポジション動向



8月のユーロ圏の注目イベント

- ・6月ユーロ圏小売売上高(3日)
- ・6月独鉱工業生産(8日)
- ・4-6月期ユーロ圏GDP・速報値(12日)
- ・8月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(16日)
- ・ECB理事会議事録(18日)
- ・8月独/ユーロ圏PMI製造業・速報(24日)
- ・8月独ifo景況感指数(25日)
- ・8月独消費者物価指数・速報値(30日)
- ・8月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(31日)

8月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

8月はユーロ圏や米国で金融政策発表が予定されておらず、手掛かり材料に乏しい。また、世界的に夏季休暇シーズンであることから、為替のみならず株式や商品市場も小動きとなるようならば、ユーロ/ドル相場は引き続き小動きとなる公算が大きい。

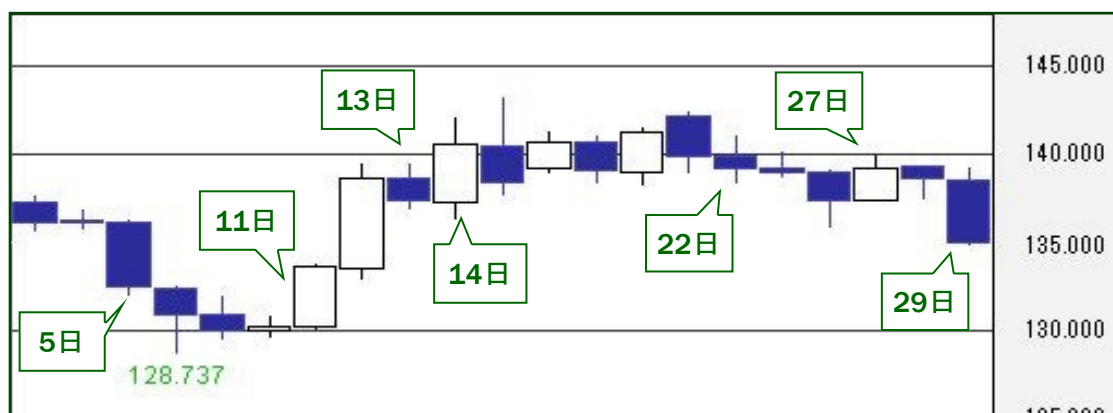
テクニカル面では、7月のレンジ(概ね1.09ドル~1.12ドル)を上下どちらにブレイクするか注目である。6月は上下にヒゲが長い十字線となった事からも、足元の相場は次のトレンド待ちと考えられる。1か月以上こう着している事を考えると、それなりの材料が出ないと、レンジブレイクは容易ではないだろう。

ただし、26日にジャクソンホールで行われる、米連邦準備制度理事会(FRB)のイエレン議長講演には念のため注意したい。同講演で金融政策の方向性が示されることが多いためである。米9月利上げに向けて地ならしを行うようならば、ドル買いが強まってユーロ/ドル相場を下押す事もあり得る。(川畑)

(予想レンジ: 1.08500~1.12500ドル)

ポンド/円 7月の推移

7月のポンド/円相場は128.737~143.239円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.8%の下落(ポンド安・円高)となった。前月の国民投票で欧州連合(EU)からの離脱が決まったショックはひとまず和らいだように見える。ただ、英7月PMIが製造業、サービス業ともに50を割り込むなど英国の景況感が悪化。これを受けて、英中銀(BOE)は景気の下ブレを回避するために次回8月の金融政策委員会(MPC)での金融緩和を示唆している。こうした中、7月のポンド/円は130円以下では下値が堅かったものの、日本の財政・金融政策の拡張期待で円売りが優勢となっても140円を越えて大きく上値を伸ばす事はできなかった。



| 四本値 | |
|-------|---------|
| OPEN | 137.324 |
| HIGH | 143.239 |
| LOW | 128.737 |
| CLOSE | 134.970 |

| | |
|-----|---|
| 5日 | 英金融グループのスタンダード・ライフが、英国最大の不動産ファンドの解約を停止したと英FT紙が報じた。また、BOEは来年3月から実施する予定だった自己資本の積み増しを銀行に求める規制を先送りすると表明。カーニー総裁が「ポンドの下落は輸出業者の支えになる」「BOEは英国を支援するために必要なあらゆる措置を取るだろう」などと発言した。これがいずれもポンド売り要因となり132円ちょうど付近まで下落した。 |
| 11日 | 前日に投開票された参院選で圧勝した自民党の安倍総裁が、「明日、経済対策の準備に入るよう石原大臣に指示した」「ゼロ金利環境を生かし、財政投融资を積極的に活用」などと発言。大型経済対策への期待が高まり日経平均株価が600円超値上がりする中で円売りが活発化。さらにその後、英労働党党首選に立候補していたレッドソム候補が撤退を発表。英国の次期首相が、メイ内相に事実上決定した事を好感してポンド買いが強まるとポンド高・円安が加速した。 |
| 13日 | メイ新首相が、外相に前ロンドン市長のジョンソン氏を起用、新設の離脱担当相にデービッド下院議員を指名。メイ政権が、EU離脱の国民投票結果を反故にして残留の道を模索するとの淡い期待が崩れる形でポンドがやや売られた。 |
| 14日 | BOEが政策金利(0.50%)と資産買入れプログラムの規模(3750億ポンド)をそれぞれ据え置くと発表。同時に公表した議事録では「政策金利の据え置きを8対1で決定した」「資産買入れ枠の据え置きを9対0で決定した」事が明らかとなった。利下げを含む金融緩和を見越していた市場はポンドの買戻しを余儀なくされた。ただ、議事録には「8月の追加緩和を見通す」「様々な政策パッケージの可能性を議論」などとする見解も示されたため、ポンド買いは徐々に収束した。 |
| 22日 | 英7月製造業PMI・速報値が49.1(予想48.7)、同サービス業PMI・速報値が47.4(同48.8)と、6月(52.1、52.3)から大きく低下。EU離脱決定後に英景況感が大きく悪化した事が明らかになるとポンド売りが活発化した。 |
| 27日 | 「日本政府の経済対策の事業規模は28兆円に」「政府は経済対策の一環として50年債の発行を検討」などと報道が相次ぐと139.90円台まで円売りが活発化したが、その後財務省筋が50年債検討の報道を否定すると上げ幅を縮小。英4-6月期国内総生産(GDP)は、前期比+0.6%と予想(+0.5%)を上回る伸びを示したがポンド相場に目立った反応は見られなかった。 |
| 29日 | 日銀は金融政策決定会合終了後に、上場投信(ETF)の年間買い入れ額を従来の3.3兆円から6兆円に引き上げると発表。その他、金融機関へのドル資金供給スキームを拡充した。この「金融緩和の強化」発表直後には、瞬間的に円売りの反応が見られたが、長期国債の買入れ増額や政策金利の引き下げ(マイナス金利の深堀り)を見送った事に対して失望が広がるとすぐに円買いに傾いた。なお、黒田日銀総裁は会見で「総括的な検証」について、2%の物価目標を早期に達成するために何が必要か検討するために行うとの見解を示した。 |

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP/JPY

日経平均

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 15698.02 |
| HIGH | 16938.96 |
| LOW | 15106.52 |
| CLOSE | 16569.27 |

FTSE100

| | |
|-------|---------|
| OPEN | 6504.33 |
| HIGH | 6780.05 |
| LOW | 6432.47 |
| CLOSE | 6724.43 |

英2年債利回

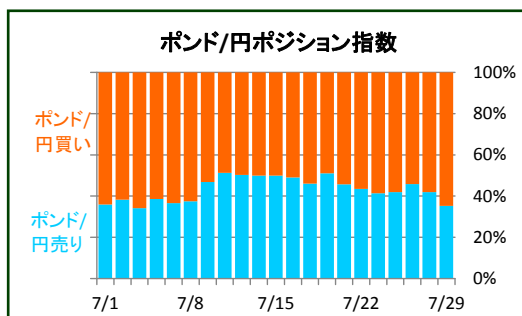
| | |
|-------|--------|
| OPEN | 0.140% |
| HIGH | 0.210% |
| LOW | 0.051% |
| CLOSE | 0.110% |

英10年債利

| | |
|-------|--------|
| OPEN | 0.909% |
| HIGH | 0.909% |
| LOW | 0.681% |
| CLOSE | 0.685% |

7月のポジション動向

8月の英国の注目材料



- ・7月英製造業PMI・確報(1日)
- ・7月英建設業PMI(2日)
- ・7月英サービス業PMI・確報(3日)
- ・BOE政策金利発表(4日)
- ・BOE議事録(4日)
- ・BOEインフレレポート(4日)
- ・カーニーBOE総裁講演(4日)
- ・6月英鉱工業生産(9日)
- ・6月英貿易収支(9日)
- ・7月英消費者物価指数(16日)
- ・7月英生産者物価指数(16日)
- ・7月英雇用統計(17日)
- ・7月英小売売上高(18日)
- ・4-6月期英GDP・改定値(26日)

8月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

8月のポンド/円相場は、4日の英中銀(BOE)金融政策イベント、「スーパーサズデー」が当面のカギを握る事になりそうだ。欧州連合(EU)からの離脱決定を受けて、英景況感が著しく悪化しており、BOEは8月に金融緩和を行う可能性が高い事を示唆している。もっとも、英金利スワップ市場はすでに8月利下げ(0.25%の引き下げ)を96%織り込んだ水準で推移しており、利下げ自体はほぼ織り込み済みと言える。このため、現行3750億ポンドに維持されている資産買入れプログラムの拡大(量的緩和の拡大)などのサプライズがなければ(1日現在、市場は据え置きを予想している)、ポンドを一段と押し下げる材料にはなりにくいだろう。また、同時に公表される議事録から次回以降の追加緩和の可能性を読み取る事ができるかも重要だ。利下げや量的緩和の拡大に対する賛成票の数(総数9票)にも注目したい。その他BOEは、インフレや成長率の見通しを作成して「インフレレポート」を発表するとともに、カーニー総裁はこれらの発表後に記者会見を行う予定となっている。

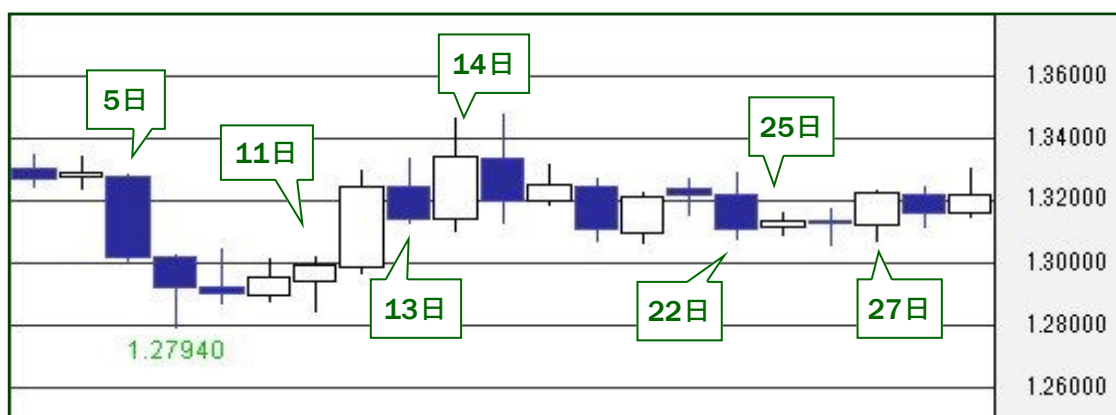
これらを経て、追加緩和の思惑が高まれば、ポンドの下落が再開する事になるだろう。ただ、投機筋のポジションは既にポンド売りに大きく傾いており、もし緩和に打ち止め感が出ればポンドの買戻しが活発化してもおかしくない状況にある。BOEの追加緩和を占う上では、EU離脱決定後の景気指標である7月英雇用統計(17日)や、7月英小売売上高(18日)なども注目される。(神田)

(予想レンジ:127.000~143.500円)

ポンド/ドル 7月の推移

GBP/USD

7月のポンド/ドル相場は、1.27940～1.34811ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.6%の下落(ポンド安・ドル高)となった。6月の国民投票を受けて欧州連合(EU)からの離脱が決まった余波として英大手不動産ファンドが解約を停止した事などから、1985年以来約31年ぶりの安値となる1.27940ドルまで下落したが、長期戦になると見られていた英首相選が比較的すんなりと、残留支持派のメイ氏で決着した事などから持ち直した。ただ、英中銀(BOE)が8月利下げを強く示唆する中でポンドの上値は重く、米国の経済指標に好結果が目立ち、年内利上げ観測が再浮上する中でドルが買い戻された事もあって伸び悩んだ結果、小幅続落で7月を終えた。



四本値

| | |
|-------|---------|
| OPEN | 1.33068 |
| HIGH | 1.34811 |
| LOW | 1.27940 |
| CLOSE | 1.32226 |

| | |
|-----|--|
| 5日 | 英金融グループのスタンダード・ライフが英国最大の不動産ファンドの解約を停止したと英FT紙が報じた。また、BOEは来年3月から実施する予定だった自己資本の積み増しを銀行に求める規制を先送りすると表明。カーニー総裁が「ポンドの下落は輸出業者の支えになる」「BOEは英国を支援するために必要なあらゆる措置を取るだろう」などと発言した。これらがいずれもポンド売り要因となり1.30ドル前後まで下落した。 |
| 11日 | 英労働党党首選に立候補していたレッドソム候補が撤退を発表。英国の次期首相が、EU残留を支持していたメイ内相に事実上決定した事を好感してポンド買いが活発化した。 |
| 13日 | メイ新首相が、外相に前ロンドン市長のジョンソン氏を起用、新設の離脱担当相にデービッド下院議員を指名。メイ政権が、EU離脱の国民投票結果を反故にして残留の道を模索するとの淡い期待が崩れる形でポンドがやや売られた。 |
| 14日 | BOEが政策金利(0.50%)と資産買入れプログラムの規模(3750億ポンド)をそれぞれ据え置くと発表。同時に公表した議事録では「政策金利の据え置きを8対1で決定した」「資産買入れ枠の据え置きを9対0で決定した」事が明らかとなった。利下げを含む金融緩和を見越していた市場はポンドの買い戻しを余儀なくされた。ただ、議事録には「8月の追加緩和を見通す」「様々な政策パッケージの可能性を議論」などとする見解も示されたため、ポンド買いは徐々に収束した。 |
| 22日 | 英7月製造業PMI・速報値が49.1(予想48.7)、同サービス業PMI・速報値が47.4(同48.8)と、6月(52.1、52.3)から大きく低下。EU離脱決定後に英景況感が大きく悪化した事が明らかになるとポンド売りが活発化した。 |
| 25日 | 1週間前に「8月利下げにはより確固たる証拠が必要」としていたBOE金融政策委員会(MPC)のウィール委員が、7月PMIの悪化などを背景に利下げ反対の姿勢を撤回し、刺激策を講じる方向に傾いている事を明らかにした。 |
| 27日 | 英4-6月期国内総生産(GDP)・速報値は、前期比+0.6%と予想(+0.5%)を上回る伸びを示したがポンド相場に目立った反応は見られなかった。その後、米連邦公開市場委員会(FOMC)が「雇用のデータは労働力活用の一定の増加を示す」「経済見通しへの短期リスクは後退」などとやや楽観的な見方を示しながらも9月利上げに直接的な言及がなかった事からドル売りに傾くと、1.32ドル台へと上昇した。 |

GBP/USD

NYダウ平均

| | |
|-------|----------|
| OPEN | 17924.24 |
| HIGH | 18622.01 |
| LOW | 17713.45 |
| CLOSE | 18432.24 |

米10年債利回

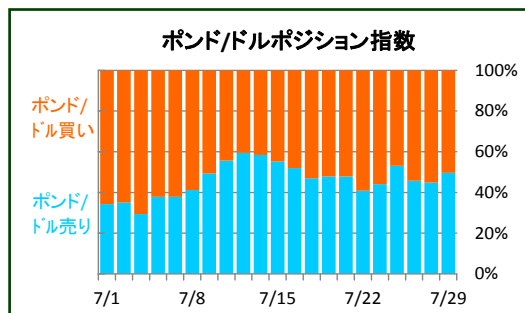
| | |
|-------|---------|
| OPEN | 1.4680% |
| HIGH | 1.6266% |
| LOW | 1.3180% |
| CLOSE | 1.4531% |

英10年債利回

| | |
|-------|--------|
| OPEN | 0.909% |
| HIGH | 0.909% |
| LOW | 0.681% |
| CLOSE | 0.685% |

7月のポジション動向

8月の英国の注目材料



- ・7月英製造業PMI・確報(1日)
- ・7月英建設業PMI(2日)
- ・7月英サービス業PMI・確報(3日)
- ・BOE政策金利発表(4日)
- ・BOE議事録(4日)
- ・BOEインフレレポート(4日)
- ・カーニーBOE総裁会見(4日)
- ・6月英鉱工業生産(9日)
- ・6月英貿易収支(9日)
- ・7月英消費者物価指数(16日)
- ・7月英生産者物価指数(16日)
- ・7月英雇用統計(17日)
- ・7月英小売売上高(18日)
- ・4-6月期英GDP・確報値(26日)

8月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

ポンド/ドル相場は、7月に付けた31年ぶり安値1.27940ドルからやや値を戻して、8月1日時点では1.32ドル台で推移している。もっとも、これで当面の下値を確認したと判断すべきかどうかは悩ましいところだろう。

まずは、4日の英中銀(BOE)イベントに注目したい。BOEは、政策金利を0.25%引き下げるとの見方が有力だが、これはほぼ織り込み済みであり、予想通りの利下げなら出尽くしのポンド買いを誘発しても不思議ではない。その反面、市場が織り込んでいない量的緩和の拡大に踏み込んだ場合や、更なる追加緩和を示唆した場合などはポンド安が再加速する可能性もある。なお、今回のBOE金融政策委員会(MPC)は、「スーパーサズデー」と呼ばれ、政策金利と議事録の公表にインフレレポートの発表とカーニー総裁の会見が行われるだけに注目ポイントが多く、その分だけポンドの変動要因も多い事になる。

また、7月分の英景気関連指標にも注目したい。7月PMIの結果は製造業、サービス業ともに節目の50を割り込んでおり、悪化が確認されている。17日の英7月雇用統計や、18日の英7月小売売上高といったハードデータにも、EU離脱の影響が滲めば、ポンド安が進みやすくなる。

一方、米国の9月利上げ観測次第ではポンド/ドル相場が、ドル主導で大きく変動する可能性もある。5日の米7月雇用統計や12日の米7月小売売上高の結果が良好ならドル高(ポンド安)に振れそうだ。また、9月利上げの有無については、26日に予定されているイエレンFRB議長の講演(米ワイオミング州・ジャクソンホールにおけるシンポジウム)で何らかの言及があるとの見方が根強い。(神田)

(予想レンジ1.27000~1.36000ドル)